

窪田 空穂 著

伊勢物語評釋

東京堂出版

伊勢物語評釈

定価は帯または箱に
表示してあります。

昭和三〇年九月二〇日 初版発行
昭和四九年八月一〇日 三版発行

著 者 窪 田 空 穂

発行者 岩 出 貞 夫

印刷所 文殊印刷有限公司
製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三十五(二〇)
電話 東京 二六一八三六 振替 東京 二七

目次

伊勢物語概説	三
--------	---

伊勢物語評釈	二五
--------	----

在原業平年譜	二九五
--------	-----

系 図	二九
-----	----

各段目次	三〇〇
------	-----

和歌索引	三〇四
------	-----

題
簽·尾
上
柴
舟

伊勢物語概説

本書の志向

伊勢物語は周知のごとく、平安朝時代に発生した歌物語で、現在に伝わるうちで、最も傑出した、殆ど唯一のものとして目されている書で、又ただに歌物語というにとどまらず、わが国文芸の最高峰をなす平安朝文芸の上から見ても、その代表的作品の一つとされている。これは一に、伊勢物語そのものの持つ文芸的魅力に依っていることである。

然るにこの書は、これまた周知のごとく、その作者も、随ってその制作された年代も全然不明である。のみならず現在までに発見された写本の伝本は、その段数も、随ってそれに含まれている歌数も、更に又、段の排列の順序も異なっている。これは写本によって伝わった古典には伴ないがちなことで、異とするには足りないことであるが、それにしても伊勢物語はそのことの多いものである。

これは古典全般より見ると、簡より繁に移ったことはあっても、反対に、繁より簡に移ったということとは想像し難いのである。伊勢物語もこの線に沿って、簡より繁に移って来たもので、最初の原形とは異なっていると推定されている。それは、伊勢物語は名は物語であるが、緊密な構成をもっていない小話集であるから、それに類似な小話を追補することは、比較的容易でもあるからである。しかし幸いなことは、追補ではないかと思われる段は少数であって、大体としては最初の原形を保っていると考えられている。

伊勢物語は文芸作品として魅力のゆたかである一方、作者は不明であり、随って制作時期も不明である上に、或る流動をもっている作品であるところから、中世より近代にかけて、文芸研究者の研究心をそそり、その研究書、研究論文の多いことは代表的である。近代では池田龜鑑氏の「伊勢物語に就きての研究」二冊一部は画期的な著である。研究書のこととてこれに対する異説もあり、傾聴すべきものもあるが、現在ではほぼ定説のごとく見なされている。

本書は、評釈という書名の示すごとく、伊勢物語の各段の文芸的価値を説くことを主とし、「評」に中心を置いたものである。随って伊勢物語そのものについての解説は簡略を期している。

本書の底本として用いたものは、藤原定家校訂の天福本である。定家はその晩年は古典の校訂に専心して、多大の功績を挙げた人であるが、伊勢物語の校訂本は、現在天福本・武田本・流布本の三系統のものがある。三条西家に伝わった天福本は最も信憑のできるものとされている。この書は流動の形をもっていた諸本を、天福二年、定家七十三歳の眼識をもって校訂したのである。

歌物語と伊勢物語

歌物語は、厳密な意味では平安朝時代に発生したものであるが、それは仮名文による歌物語の意で、仮名文字発生以前よりその系統のものは既に厳存していたのである。古事記・日本書紀にも相應の量の歌謡がまじっているが、単独に、歌謡そのものとして取扱われているのは一首もなく、すべて何らかの事件と結合した形において存在しているのである。のみならず、興味ある事件には必ず歌謡が添うべきものとして、強いて添わしめるよう

にさえしている。随つてそゞうした一節は立派な歌物語である。平安朝時代のそれと異なるところは、事件の方は漢文をもつて記してあるというだけである。この傾向は更に進んで、歌謡を連続させることによって、一つの事件の進展を現わして、抒情をもつて叙事を遂げているものがあり、又、更に進んでは、男女の贈答の歌謡を繰り返すことによって、やや複雑した叙事を遂げているものもある。

記紀歌謡はその名の示すように大体諸物で、口承文学であるが、万葉集になると進展して記載文学となつていく。これは歌に、より多くの文芸性をもたせようとする要求からのことで、すなわち一首の独立した歌によつて、叙事と抒情を遂げようとしたのである。その現われの主なる形は長歌であつて、相應に複雑な内容を盛つたものがある。その中には、内容はさして複雑ではないにかかわらず、取材の背景となつてゐる事件を、「序」として添えているものがある。これは立派な歌物語である。しかし万葉集は、長歌が衰え、短歌が盛んになる経過を示している歌集で、従来長歌によつて遂げていた叙事性を短歌によつて遂げようとしてきた跡を明瞭に示しているのである。いかにしてそれを遂げようとしたかという点、短歌の連作に依つてである。事実、万葉集には相應に多くの短歌の連作があり、それに「序」を添えることによつて、複雑な叙事と抒情を行つてゐるのである。柿本人麿、山上憶良などは、その得意とするところは長歌であつたが、他方短歌の連作もして、その方面でも面目を發揮しているほどである。又、万葉集には「問答」と称する小部立があつて、男女の短歌の問答を併せ録することによつて、相互の感情を現わしているものがある。これは古くからあることではあるが、それを一つの部立とし、又歌そのものよりも、むしろ叙事性に興味を置いていることから見て、歌物語的系統のものと言えるのである。

以上極めて概略ではあるが、記紀・万葉を通じて、歌物語という名称は無かつたが、歌物語そのものは蔽存し、

優に歌界の一分野をなしていたことが知られる。抒情の歌に叙事の事件を添え、興味深いものにしようとする要求が、いかに強いものであったかと思わせられる。

今一つ、平安朝時代には、歌物語の当然復興すべき事情があった。それは和歌はその性格として、特殊性をもった文芸だということである。特殊性というのは、和歌は本来、文芸そのものとして生まれたものではなく、生活上の必需品として生まれたもので、そしてそれは同時に、他面文芸性をも帶び、必需性と文芸性が一体となっているもので、この根本性格は、時代に依ってその割合の率は異なるが、分離することのできないものだということである。平安朝時代に限って見ても、その生活必需性の第一は、結婚である。上代よりの風習として、結婚は自由結婚で、当事者同士の間で取結ぶべきものとなっていたが、その交渉は和歌の贈答をもってすることが鉄則のごとくになっていた。まず男から意志表示をし、女はそれに答えるのであるが、これは一に和歌をとおしてのことで、それに依って胸中を示し合い、又教養の程度を示し合ったので、謂わゆるメンタルテストだった。多量なりとも身分ある階級の者にとっては、作歌能力のないものは結婚能力のないことだったのである。万葉集時代より古今集時代までの和歌衰退時代にあってもこの状態は異ならず、それに依って和歌の命脈をつないだのである。結婚後も別居を常としていたので、自然、書信の交渉があったが、これも和歌に依ってするのであった。又、社会生活の上でも、吉事の賀、凶事のくやみも和歌をもってすることになっていた。又、物品の贈答にも、必ず和歌を添えることになっていた。更にまた公人としては、当時の宮廷は儀礼の府で、節会が続ぎ、随って賜宴も伴っていたが、酒杯の献酬には、まず歌を詠んで、その上で勧めるべきことになっていた。要するに、作歌能力がないと社会生活もできず、少なくとも引けめを感じ、肩身狭い思いをしなければならなかったのである。実用品としてのこの類の歌は、もとより一面文芸品としての美しさをもっていなくてはならないが、より多く

重大なことは、その人、その場合に適切なもので、必要を充たし得るものでなくてはならない。随つてその歌の背後には、必ず特殊の事情が伴なっているわけである。もしその歌がすぐれたものであり、その作者が魅力ある人であったならば、そういう歌を記録で読み、或は伝承によつて知った際、自身の同じ場合と比較し、その背後の事情をゆかしみ、憧れをもつて想像し、空想することも、極めて自然なことである。

仮名文字は一名女文字という。女性の使用する文字の謂いである。女性の文字の使用は、その主なるものは和歌の書写、消息である。女性が既にそれであれば、その女性を対象としての男性の和歌、消息も同じく仮名文字ならざるを得ない。仮名文字は急速に一般化したことと思われる。記紀・万葉の歌物語は、漢文をもつてするより外なかった。その不便と不自然さは言うまでもない。

歌物語は伝統久しいものである。時代の生活者は、各自に最も身近な、共通なつながりをもつたものとして、歌物語を要求している。更にそこには、歌の背景である事件を叙する文章として、漢文とは比較にならぬまでの、適切にして安易な仮名文がある。これらが合致して、新しい面貌をもつた歌物語が復興して来たということは、極めて自然なことで、無かつたとしたら、むしろ訝かしい程のことだったのである。

伊勢物語の作者の意図

伊勢物語を文芸として見る上で、最も興味ある点は、その文芸作品として優秀なものであるということが第一であるが、それに次いでは、作者がいかなる意図をもつて作つたかということである。文芸作品はもとより人生を対象としたもので、人間性の深所に触れ、それを読む者をして共感せしめ、感動せしめ、ひいては自身を反

省せしめるものである。芸術は永遠なりと言われているのは、言い換えると人間性は不変なりということ、文芸作者の要諦は、人間性を幾ばくの程度まで把握し得るかに依って、その高下が定まるものである。しかしその把握した人間性は、具象的に表現することに依って、初めて読む者に伝えうるものである。

文字をとおしての表現には、可能の限界がある。文芸作者が、自身の把握した人間性を効果的に、強力に表現しようとするれば、その同時代人に、最も親近感をもち得る、最も感動し易い形においてしなければならぬ。これは鉄則である。親近感とは、その時代の生活情調をとおすということである。生活情調は時代時代で異なるもので、それが表現様式の変化をもたらす原因である。この間の関係は緊密である。

伊勢物語を貫通している思想は、物のあわれということであり、あわれを知る男女関係である。これは平安朝時代の貴族階級を貫ぬいてのもので、このことは既に貴族階級を貫ぬいての標語の如くなり、各人がひとしく所期し、憧憬していて、言わば社会道德そのものの如く目されていたものと見える。

その著しい例は、伊勢物語第四段に扱われている業平と、高子の恋愛関係である。高子は藤原長良の女で、後の清和天皇の皇后である。将来、国母となられるべき女性が、処女性を保って入内すべきことは、常識からいって当然のことである。その女性の入内前に、業平は既に関係を結んだのであるが、それはあらわなる問題とはならなかったと見える。加えてこのことは、伊勢物語成立以前、既に勅撰集の古今和歌集に、端書きとしては異例な長巻をもって記されているのを見ると、恋愛に関するあわれは、伊勢物語以前から既に道義を超えたそれ以上のものと許されていたので、伊勢物語の作者は単にそれを継承したに過ぎないのである。

又、伊勢物語第六十九段の業平と伊勢の斎宮との情事は、むしろこれを超えるものである。斎宮は現天皇の御手代として伊勢神宮に仕える為に、天皇即位と共に遣わされる神聖な職で、内親王と定まっていた。随って、清

浄な処女性を保っているということが第一条件となっていたのである。その時の斎宮は、文徳天皇の皇女^{いし}怡子内親王だったのである。その斎宮に業平は通じたのである。その際の後朝の歌は、これまた古今和歌集に載っており、斎宮のは「よみ人知らず」となっているが、業平のは、名を現わしているのである。

これらは際立った例であるが、物のあわれより発する行動は、一切の社会道義を超えた最も重んずべきものとされていたことが知られる。更に又この時代は、藤原氏が宮中に根を張り政權を壟断しはじめた時代であるが、その方法は一に結婚に依つてである。即ち、藤原冬嗣はその娘順子を仁明天皇の皇后に、又、基経の子の良房はその娘明子を文徳天皇の皇后に、良房の兄、長良はその娘高子を清和天皇の皇后とし、各々その出生の皇子を皇位にのぼせることにより、三代に互つて関白となり、太政大臣となつて、政權を掌中に収めたのである。これは大和朝以来の律令制度が崩れ、莊園大貴族の支配する時代になつたことで、政治上の大変革であるが、政權獲得の手段を結婚政策によつて遂げたことが注意される。これはそうした方法を阻止するに足る強力な氏族が他になく、独占的となつたことに依ると思われる。

男女關係をもととする生活情調としての物のあわれを、強力に温酸させたものは、外面的には、当時の貴族階級が藤原氏の勢力の下に統一され秩序づけられて、有識有能の人々も、政治上にはその手腕を伸ばすところが狭められ、奪われてしまつた結果、勢い文化面に、はげ口を求めたからであらう。文化面の第一は文芸であつたが、この時代には漢詩文は次第に魅力を失つて、反対に和歌が魅力あるものとなつて来た。それは、謂わゆる六歌仙時代から、実用と文芸との両面をもつていた和歌は、より多く文芸的になつた。

新興和歌の特色とする文芸面の發揮ということは、作歌の取材として自然の風物を取り入れるということである。これは万葉集と古今和歌集とを一瞥しただけでも解る。万葉集は、その大半を占めているのは相聞すなわち

恋歌であるが、古今和歌集では春夏秋冬の四季の歌である。そしてその歌は、これを恋歌に移してもさして支障のない歌が少なくない。これは当時は仏教が新しい力をもって人々に浸透し、空間的には、人間も動植物も、一つの絶大なる生命力の、異なった現われであり、時間的には、同じく無常と流転とを生態として存在するものであり、そこに相通い得るものがあると観じたのである。これが物のあわれの母胎であって、根深いものとなっている。この心は四季の歌だけではなく、恋歌の上に及ぶようになった。

男女の相聞歌は、古くは男女当事者間だけのものではあったが、新興の歌風によって物のあわれを主体としたものとなると、憚るところなく公開のできるものとなったのである。

上に述べた社会情勢の上に、新興の歌風が勢力を得て来たので、相俟って歌合が興って来た。歌合は、作歌に堪えうる多くの人が一つに集い、与えられた題によってその優劣を競う遊びで、興味の中心は秀歌の誉れを得ることである。多数が集まって作歌をするという形式は、既に万葉集時代からあり、奈良朝では宴歌が盛んであったが、これは宴席の余興ともいふべきものであった。平安朝に入ると、歌その物の優劣ということが興味の中心となり、相應に催されたものと見える。その現在に伝わっているものは、古今和歌集に載っているものでも、寛平の御時後の宮の歌合の歌、在民部卿の家の歌合の歌、その他がある。前者は宇多天皇の母後の御所、後者は在原行平の邸で行われたが、その後も朱雀院女郎花合、亭子院歌合などがあり、花合は歌合の一種である。

古今和歌集撰進以来、和歌は社会的位置を確保するを得て、従前は漢詩に対して引け目を感じていたのが、むしろ優位を占めるようになり、随ってその上での名誉を競う状態となった。その欲望を遂げる上で、歌合という晴れての競争場ができたのである。いかにかして秀歌を作りたい、いかにすれば秀歌が作れるかと、その参考書を求める気分は、旺盛として湧いて来たことと思はれる。しかも、伊勢物語の成立したと推定されている後撰和

歌集の撰進直前には、古今和歌集が歌その物を中心としたのとはやや趣を異にし、恋歌の作者その人に興味の中心が移り、身分の高い男女の贈答をよるこぶ風となって来た。このことは後撰和歌集が示しているのである。

伊勢物語の作者は、こうした寮閑気の中に生存していた人である。どういう身分の人であるかはもとより解らないが、貴族階級の一人で、多分失意の状態を続けていた人が、第三者の立場に立たされて世相を傍観していた人に見える。高い教養をもっていた人で、当時の学問である漢文、わが古典にも通達し、又当時としては新興仏教であった大乘仏教も身に体し得た人に見える。更に又、当時の貴族の常識として男女関係の体験にも富み、男女心理の機微にも通じていた謂わゆる苦勞人であったと思われる。それらにもまして身につけていたのは、文芸家としての天分で、これは甚だ高度のもので、作歌力の上でも、伊勢物語中には、この作者の自作と見るより外ないものが相応に多くあるが、実に力量に富んでいる。殊にその力量を発揮しているのは、取材として捉えた男女を、その場合場合にふさわしく変化させている点で、これは物語作者としての才を示しているものである。

伊勢物語の作者が、いかなる人世観を抱き、いかなる観点から多くの人々と事件とを捉えているかは、一見複雑に似て実は簡単である。

この作者の抱いている人世観は、仏教の説くところのそれで、それ以外のものはまじっていない。有情非情を問わず、あらゆる生物は同一の生命の現われであるとする根本理念は、その自然鑑賞の面に現われているが、それはさして重くはない。強力に現われているのは、人間のもつ煩惱すなわち本能の面で、その中でも特に愛欲を重いものとしている。本能とは生命そのものの現われで、生命の姿ともいえるものである。これは物欲と共に生命のある限り捨てることのできないものである。しかし生命にも限界があると共に愛欲物欲にも限界があって、人間は限りないものを夢みてその聊しか得られず、生活とは要するに不満の連続である。その意味では人間と

は哀れな生物である。

しかし人間には、人間特有の精神力があり、或る人は生得の精神力によって、殆ど無意識に本能の限界を会得し、さして不満なき生活を過ごし得る。また或る人は、知性の働きのよって、同じ生活を過ごし得る。そうした人々を、第三者の立場に立って傍観すると、人間としての哀れさの蔽い難いものがあるが、それと共に美しさの言い難いものがあって、甚だ魅力的なものに見えるのである。これは言い換えると、弱者に対する同情ともいえるもので、同情というよりもむしろ共感という方が適したものである。これは人生的に実に根深い感情である。伊勢物語の作者の、人生に對してとった観点は、この哀れさのもつ美しさということで、それを文藝的に具象的に現わそうとしたのが伊勢物語である。

伊勢物語の作者の創作方法

伊勢物語の作者が、その意図を表現しようとして、第一にその胸中に浮んで来たのは在原業平であった。この人は作者に取っては、時代の距離が遠くない上から、また当時の人がひとしく親近感をもっている上から、作者の眼から見ると、絶好の材料だと思われたのである。

業平は、平城天皇の皇子阿保親王の子で、母は桓武天皇の皇女伊登内親王である。まさに高貴な身分である。人柄については、三代実録に、「業平容貌閑麗、放縱不拘、略無才学、善作和歌」とある。「放縱不拘」は私生活についての評であろうが、当時の貴族としては格別のことではない。「略無才学」は当時の学問といえは漢学であるが、そこらは深く修めようとしなかったのであるが、「善作和歌」は、反對に国文の教養があったことを裏書

きしたもので、これは先覺の見識があつたともいえる。父親王の意により、兄行平らと共に臣籍に降つたのであるが、これは無力なる皇族に終らせず、実務に携わる路を拓かせようとしてのことと見える。そうした業平ではあつたが、極官が左近衛中将で、それより上には進むことができなかった。任官の実権を握つていたのは藤原氏である。公人の生命である官位の、その出生の貴さに比して低かつたこと、そしてその理由が新興氏族の權力に制されたためであるということは、同情せずにはいられないことである。業平はその人全体が既に衰れで、恐らくは同じく失意者であつたろうと思われる伊勢物語の作者としては、深く同情せずにはいられなかったのである。

他面、業平は、古今和歌集撰進以来、俄かに勢力を得て来た和歌の世界では、第一人者の位置に据えられて、時代の憧憬の的となつていた。すぐれた歌人である伊勢物語の作者としては、業平の作歌の動機、その心境は、手にとる如く理解のできたことであろう。業平の歌を利用し、これに取材して、その胸中に抱いている「あわれさの美しさ」を具象化し、これを高揚しようと思ひ立つたことは、極めて自然な思ひ寄りと言わなくてはならない。

次に、その具象化の方法であるが、伊勢物語の作者は、古今和歌集の詞書を基本とすることが、作者としても、又読者としても最も容易であり、又効果的でもあったのである。

和歌は上にも言つた如く、実用品にして文芸品である。万葉集の相聞、挽歌、雑歌のいずれも、一人の人を対象にして、或る事情の下に作つた歌で、それ以外のものではなかった。随つてその事情を添えなければ、第三者には十分に伝えられないものである。可能な限り詞書を添えているのはその為である。古今和歌集となつて、和歌は純文芸の面を發展させ、万人を対象としての作を加えて来たのであるが、これは自然鑑賞の作、即ち四季